

最優秀賞

神奈川県共同募金会長賞

コロナのなかでもできること

横浜市立桜岡小学校（港南区）

四年 田中 紳 慈

ぼくのおじいちゃんはこの夏、特別養老老人ホームに入りました。三年前、お医者さんにアルツハイマー型にん知しようと言われたおじいちゃん。それでもおばあちゃんと二人でくらししていました。家の階段や道路で何度も転び、顔や頭にけがをして救急車で病院に運ばれてばかり。三十年も住んでいた家ではくらせなくなっていました。

ぼくは毎年、お正月には一緒にぎょうざを作って、食べるのが楽しみでした。

しかし去年、コロナウイルスの感染が広がってからは、おじいちゃんに会えなくなりました。電話では何度も話しているのですが、何だか、ぼくの言っていることがどんどん分からなくなっている気がしました。

お父さんは休みの日、おじいちゃんの家に行ったり、仕事を休んで病院に連れて行ったりすることが増えました。

ぼくは、お父さんに話したいことやしてほしいことがあってもがまんしました。

お父さんは五月五日、おじいちゃんのワクチンを予約するため、朝からずっとパソコンの前にすわっています。「なかなかつながらない」とお父さんはイライラ。ぼくはとなりで「パソコンがんばれ」と何度も言いながら、お父さんをはげまします。お父さんも、笑顔になって画面を見えています。

一時間半後、ようやく予約が取れました。お父さんは目になみだをためて「しんくん。ありがとう」とぼくをだきしめました。

この日予約が取れたおかげで、おじいちゃんはワクチンを打ってからホームに入ることができ、今も元気にくらしています。

おじいちゃんに会えないのはさびしいけれど、ぼくにもできることはある。これからは、ほかのお年よりのためにも、自分のできることを探し積極的に取り組みたいと思います。